2012 年夏

福島を感じて考えるスタディーツアー
「スタ☆ふく」

活動報告書

2012 年 10 月

企画：JASP 福島

企画実施：(株)福島交通観光

協賛：(株)バルニバービ／NPO 法人まちづくり喜多方

０．目次

0. 目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2. 企画背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3. 企画趣旨・目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4. 組織構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

5. 各ツアー詳細・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

5-1. 水産・漁業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

5-2. 観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

5-3　農業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

6. 広報／メディア掲載について・・・・・・・・・・・・27

7. スポンサー／ご協力いただいた方々・・・・・・・・・35

8. 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

9. 問い合わせ先・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

１．はじめに

「学生の自己満足イベント」こういう評価を受けるのがとても嫌でした。2012 年 3 月 11 日に私たちが行った復興イベント「JASP in Fukushima」は、大きなエネルギーをもって行われましたが、その影響は目に見えて測れるものではありませんでした。この企画が動き始めた当初から「福島になにか落とし込みたい」という想いで、目に見えるような成果を求めてきました。もちろん、目に見えないものにもとても大切なものがあると思います。しかし、それも含めて福島という地域に寄与したいという想いを持って取り組んできました。

今回、『目に見える成果があったか』と問われれば、それは自信をもって答えることができません。しかし、『自己満足に終わっていないか』という問いには、自信を持って自己満足ではないと答えられます。それは参加者アンケートの結果や、地域からの声が証明してくれます。私たちが今回「スタ☆ふく」を催したことによって、人の心のなかに変化を起こすことができました。それは、福島への愛着や理解であり、未来への前向きな声を引き起こせたことです。スタディーツアーという取り組みによって、参加者や地域に前向きな声を起こすことができると証明することができたと考えております。この企画の経緯や意義をこの報告書を通して感じていただければ幸いです。

この場を借りて、改めて協力してくださった福島交通観光(株)をはじめ、協賛くださった(株)バルニバービ、NPO 法人まちづくり喜多方などの各法人関係者のみなさま、告知に協力・応援してくださったみなさま、参加してくださったみなさま、受け入れてくださった福島のみなさまに心から感謝申し上げます。今後ともスタッフ一同、より良い企画を目指して努力を続けてまいります。

この報告書を通して私たちの活動内容をご理解いただければ幸いです。

2012 年 10 月

プロジェクトマネージャー

吉田哲朗

２．企画背景

JASP（Japan All Student Project）は 3 月 11 日の東日本大震災をきっかけに全国の学生が繋がり、日本の復興への若者の無限の可能性を発信することを目的として福島大学の学生有志を発起人として 2011 年 11 月に設立された学生団体です。

これまで、震災から時間がたって風化していく被災地の現状に関心を持ってもらうことを目的に「日本を一本に～日本全国メッセージ集め&タスキリレー～」「全国学生復興イベント　JASP in FUKUSHIMA」といった企画を行い、タスキリレーではのべ 1000 人が参加しタスキをつなぎ、3 月 10 日・11 日の 2 日間福島市内の街中広場で行われた「JASP　in FUKUSHIMA」では二日間でのべ 1 万 3 千人を動員するなど成功を収めました。

全国の学生がつながり企画を成功に導いたという成果があった反面、「福島の今を知ってもらう」という目的には課題が残りました。一口に福島と言っても震災以降変わってしまったことや、地域ごとにもともとあった魅力など様々な面があります。そんな福島にある辛い現状や自然や人の魅力などすべて含めた「福島の今」を目で見て耳で聞いて肌で感じて、直接体感してもらいたいという思いで企画されたのが福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」でした。

３．企画趣旨・目的

東日本大震災以降福島県の抱える問題は多く、複雑なものであります。震災から 1 年半というこの時期においては、各地域によって抱える問題や事情が異なり、一言で「福島」とくくることは難しい状況です。そのようななか、私は多くの人々が「福島＝大変そう」というような簡略なイメージを持ち、福島を見ているのではないかという疑問がありました。私たちは福島が日本の抱える社会問題の集積地と考え、その問題に身を持って体験することに価値があると考えました。福島に関心を持ちつつもその実態をつかめない人々に対して五感使って現状を体験してもらい、福島への関心を高めてもらうと同時に、イメージでしか語れなかったことを、より明確にしていきたい。そして、そこから新しいアクションやアイデアが生まれていくことを期待して企画されたものです。

＜テーマについて＞

本企画は当初、スタディーツアーを我々JASP が担当し、その次のステップとしてビジネスコンテストを他団体が担当するコラボレーションを見据えてスタートしました。当初の目的は、ビジネスコンテストで新しいビジネスアイデアを創出することなどが挙げられていましたが、企画途中でビジネスコンテスト実施を断念するに至り、結果としてスタディーツアーのみの実施となりました。今回の 3 つのテーマである、「水産・漁業」「観光」「農業」という産業に焦点を当てたものは、本来ビジネスコンテストとの関係性を意識して設定されたものでもあります。しかし、ビジネスコンテストがなくなっても設定した 3 テーマの抱える風評被害をはじめとした問題は多くの人に現地の声を聞いてもらうべきものだと捉え、ツアーを通して理解をしてもらいたいという想いがありました。

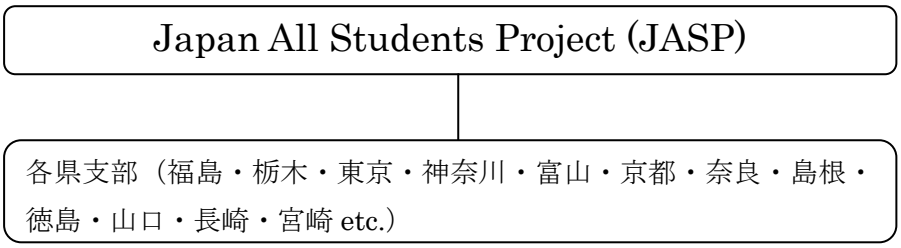
＜企画目的＞

◎定性目標
・復興支援を加速させる一助となること。
・参加者にありのままの福島を経験してもらうこと。
・参加者の意識の変化を起こすこと(福島への印象の具現化・関心の高度化)
・福島の若者と県外の若者の交流を生むこと
・地域にプラス作用を起こすようなアイデアの創出
◎定量目標
・参加者アンケート満足度 80%以上

４． 組織構成

- 全国 JASP

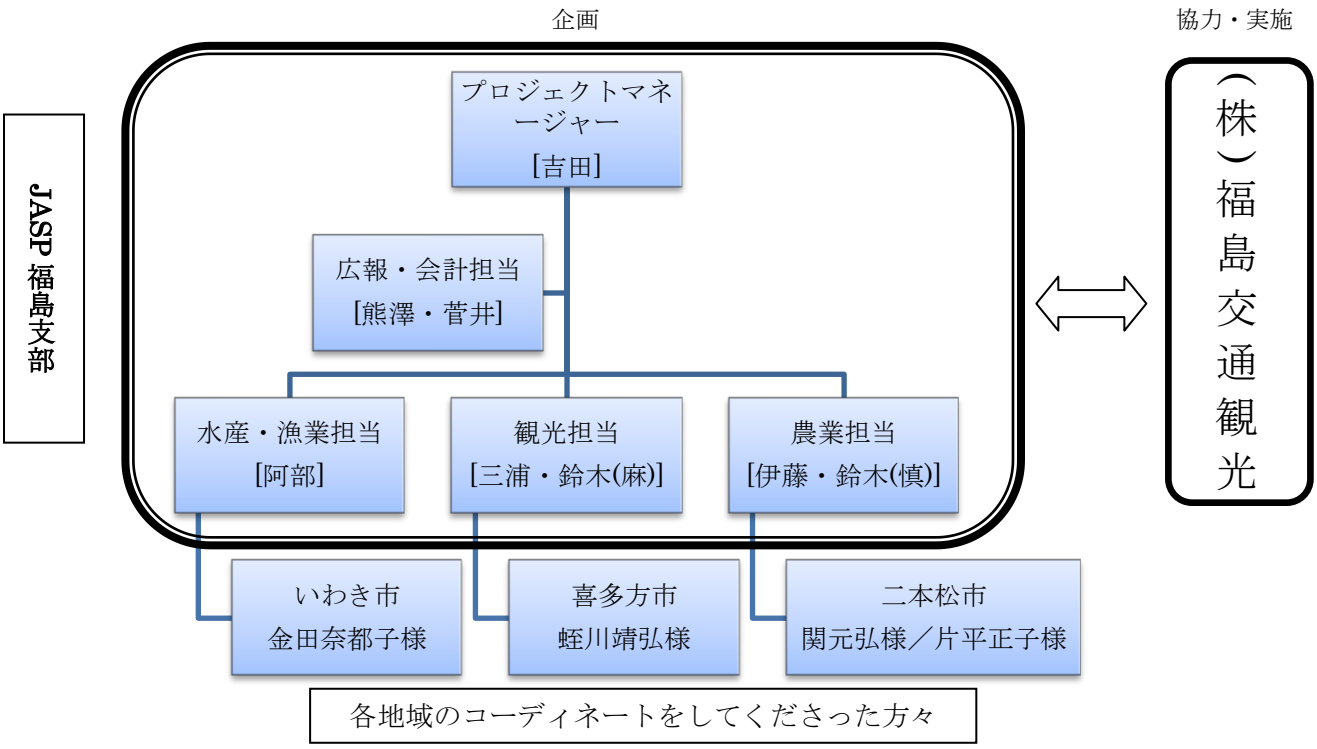
2011 年 11 月に福島大学の学生を中心に設立。各県の支部が集まり、JASP を構成している。



設立：2011 年 11 月
代表：石井正和（福島大学 4 年）
主な活動実績：「日本を一本に！全国一周たすきリレー」「3.11 JASP in Fukushima」

- 「スタ☆ふく」プロジェクト

本プロジェクトは、支部の 1 つである「JASP 福島支部」の独自企画として企画されたものであります。企画・運営に携わった学生はすべて福島大学の学生です。



５．各ツアー詳細

5-1. 水産・漁業ツアー

〈テーマ〉
『様々な立場でいわきを見つめよう 』

〈テーマ設定の背景〉

昨年３月に起きた東日本大震災以降、メディアでは津波被害の大きい宮城県、岩手県の地域報道が多く垣間見えます。一方で放射能汚染の被害を受けた福島県沿岸部や、そこで生きる人々の様子は、福島原発事故の放射能汚染以降、より複雑に絡み合う問題の大きさやそれが短期的な問題解決ではないが故に報道が立ち入り難く、受け取り側としては印象が不透明であり、そこから不安や恐れというものを生み出してしまうアイロニーが含まれています。

今回訪れる福島県いわき市の漁業の現状としては、東日本大震災前、昭和 50 年代後半をピークに水揚げは大きく減少し産業が衰退しました。震災後は、漁港や漁船、魚市場・漁具倉庫などの漁業関連施設の壊滅的被害、沿岸域での操業自粛、安全性が確認されているにも関わらず、取引価格の下落など被災地の中でも福島県沿岸部の漁業独自が抱える問題が多く存在し（いわき市水産振興室　本ツアー資料『いわき市の漁業の現状について』より H24.8)、復興には多くの時間が必要となることが予想されます。

ツアーの中では津波被害はもとより、原発事故によるこういった海水汚染問題、風評被害問題などの課題・現状を、情報の壁を越え参加者が現地を訪れることで、メディアに情報淘汰されないありのままの様子知ることを目的としています。また、業種の異なる漁業関係者の方から多く講話の機会を得ること、その中で地元住民との交流・世代の違う参加者との意見交換を交えることで多方向から柔軟にいわき市が抱える漁業の見解に触れること、また、人がもたらす活力ある被災地の印象を与えることも重要な目的要素であると考えます。

〈実施日〉
2012 年 8 月 18 日(土)~8 月 19 日(日)
〈場所〉
福島県いわき市
〈動員人数〉
計 33 名　（東京発：19 名/福島発：14 名）
〈料金〉
東京発：19,900 円／いわき発：17,600 円

〈2 日間の行程と内容〉

時間	行程	Comment

8 月 18 日(土)

7:00	新宿駅発	
11:00	行政による講演	いわき市の漁業の現状についての講演をいただきました。
12:00	昼食	○○丸のように船の名前をもじったグループごとに自己紹介をしながら昼食休憩を取りました。
14:00	江名漁港	乗船体験をしながら、しらす漁のデモンストレーションを見学しました。
15:00	漁港着 ロープワーク講習	無事に漁港に着きました。漁師さん指導のもと、漁をする際や停泊する時使用する縄の結び方についてレクチャーを受け、実践します。体で覚えるのはなかなか難しい。漁師さんの見事な手つきに感無量です。
15:30		採取したしらすは検査に出します。

		漁師の佐藤さんから継続的に行っているしらすのモニタリング検査の結果から安全であることのレクチャーを受けました。
16:30	宿泊施設着	旅館若旦那の再建までの話を受けた後、当日の感想や印象をグループ内で共有。浪江町から避難してきたお弁当屋さんによる復興弁当を夕食にいただき、夜は地元漁師さんとの交流会で 1 日目は終了です。

8 月 19 日(日)

8:00	宿泊施設発	
8:30	薄磯海岸見学	「がれきに花を咲かせましょうプロジェクト」地元有志による住宅の跡地や防波堤に花の絵をペイントするもので、津波被害と対象に復興に前向きに取り組む様子を見学しました。
9:00	工場見学	津波で全壊したものの機材を集め数か月で再建を果たした地元の蒲鉾工場を見学します。

10:30	鰹節工場・販売見学	加工から販売までを夫婦二人三脚自宅で行う様子を見学しました。
11:30	昼食	海産物を取り扱う地元の食事処で鰹節職人の講話を受けます。原発立地当時のお話や被災時のお話、参加者の多くがとても胸が詰まる想いを持ちました。その後、海老メインの豪華なお食事を頂きました。
13:00	感想・振り返り	ツアー全体を通して各自感じたものを参加者の中でアウトプット・共有しました。
16:45	いわき出発	
21:00	新宿着	

〈参加者アンケートの結果〉

	悪					良		
	1	2	3	4	5	6	計(人)	平均
① ツアー全体について	0	0	0	0	9	15	24	5.62
②本ツアーの趣旨について	0	0	0	0	7	17	24	5.7
③本ツアーの料金設定について	0	1	2	6	7	8	24	4.79
④お食事について	0	0	1	5	10	8	24	5.04
⑤本ツアーのコンテンツについて	0	0	0	1	8	15	24	5.58
⑥タイムスケジュールについて	0	1	1	2	13	6	23	4.95
⑦学生スタッフの対応について	0	0	1	0	8	15	24	5.54
⑧他の参加者との交流について	0	0	0	1	12	10	23	5.39

参加者のコメント(抜粋)

・何のつながりもない福島に来て、漁師さんや被災者の方の顔を知って、福島が身近になりました(20 代・女)

・他ではないようなプログラムが良かったです。ありのままの福島がみれたこと、そして漁師さんをはじめみなさんとても前向きだったのが素敵でした。(20・女)

・本当にいろいろなことを学び、感じ、楽しんだツアーでした。自分から行動することが何よりも大切なんだなと思いました。(10・女)

・もっと県外の学生を呼ぶことができたらと思った。(10・男)

・本物の体験をさせていただきました、感謝しています。
いろいろ交流が深まるにつれて参加者の体験や気持ちもますますわかり「気づき」が「気づき」を生むような広がりや深まりを感じました。(50・女)

〈感想〉

震災後いわき市が抱える漁業問題についてプロジェクトとして取り扱うのは私自身初めての経験でした。何度か視察に訪ねる中で、地元漁師さん他、津波により直接的な被害を受けたもののそこで営業再開した地元住民の想いを聞くことができ、同時に地元に住んでいるにも関わらず自分の知識の無さや情報弱者であること、また関わろうとしない態度を恥じました。地元住民の話しを聞くたびに、たとえプロジェクトを進める中で困難があってもこの状況を伝えなければと企画担当としての責任感を感じ、本番まで意気込みました。

ツアー中は、実際参加者が来てから伝えたい部分を十分に引き出ことを意識しました。本番は一度きり、その中で何度も失敗したと思う瞬間がありました。しかし、気づいたらこちらが想像した以上に少しでも多くの情報を得たいと参加者からは自発的に質問が飛び交っていました。実際企画者側が伝えられた部分・引き出せた部分は一部だったかもしれません。しかし、参加者側の熱心な姿と地元来てくれるだけで嬉しいと自分が置かれている状況を語る地元住民、両者の想いが交錯していることは事実で、伝達という面は別として深い絆を作れた、そこに今後のつながりを期待することができると今は考えています。

このような機会の中で浮き彫りになった課題としては、内部の情報は内部の人間の正確な想いを乗せて外部に届けられていないことです。例えば地元漁師は漁に規制をかけられているのではなく、真に安全なものを提供したいという想いから自粛しています。この事実はツアー参加者の多くが知らない情報であり、実際対話すること、現地を訪れることで正確な理解が進むことの表れでもあると考えられます。漁師さんは被災者であることをアピールしたいのではなく、本来の姿つまり漁をしている姿を届けたいとの想いが強く先方からの希望で乗船体験をツアー内容に盛り込むことができました。がれき撤去やモニタリング検査用の魚を採取する様子よりも、そちらを選択したのには、福島の印象を少しでも明るくしたいという面持ちが見えるかと思われます。

また、地元住民にとっても参加者との交流を経て地元に生きる人々の問題意識の向上や、またそれに向けてのやる気・元気を提供することができました。直接的な効果は見えにくいとしても復興の加速度が上がることに繋がったのではないでしょうか。両者にとってプラスとなるような場を今回企画・提供できツアーが成功に至ったのも地元住民の協力と想い、また参加者の意欲的な心持ち賜物と感謝しています。

漁業ツアー担当
阿部詩音

5-2. 観光ツアー

〈テーマ〉
『観光地・喜多方を感じよう』

＜テーマ設定の背景＞
　テーマ設定の背景として、喜多方が受けた震災の影響がありました。喜多方は蔵の町やグリーンツーリズムとして観光がさかんな地域でしたが、震災以降は風評被害により観光客が減ったということを視察の際に知りました。そのため、観光地である喜多方の魅力を参加者に伝え、参加者に喜多方を好きになってもらうため、このテーマを設定しました。

〈実施日〉
2012 年 9 月 1 日(土)～2 日(日)

〈実施場所〉
福島県喜多方市

〈動員人数〉
計 27 名（東京発：15 名/福島発：12 名）

〈料金〉
新宿発：17,000 円／郡山発：11,000 円

〈2 日間の行程と内容〉

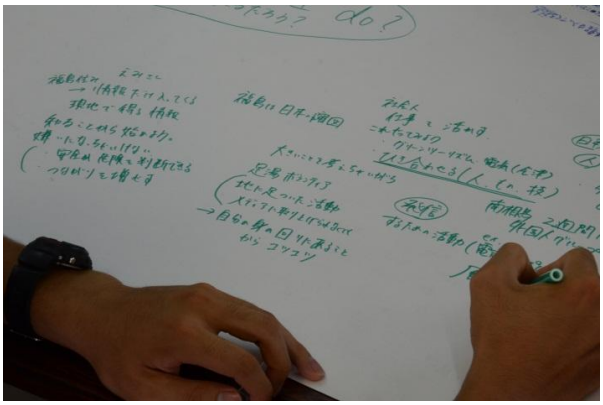
時間	行程	Comment
1 日目		
7:30	東京組新宿西口コクーンタワー出発	
11:00	東京組・福島組郡山で合流	
12:30	喜多方着	
12:45	お食事処「旬」で食事	参加者にグループごとに座ってもらい、自己紹介しながらの昼食。 会津の郷土料理の「こづゆ」をいただきました。

14:00	大和川酒造 酒蔵見学	喜多方市内の大和川酒造の酒蔵見学をしました。
14:30	大和川酒造　佐藤社長の講演＆質問	震災後の酒造りの様子、飯舘村から避難してきたいたてまでいの会との共同の酒造りの様子などお話していただきました。

15:35	NPO 法人まちづくり喜多方　蛭川さんの講演＆質問	震災後の喜多方について、震災への対応についてなどお話していただきました。
16:30	1 日目の振り返り(グループで話し合い)	参加者に「今日 1 日で印象に残った言葉」のテーマで話し合ってもらい、発表してもらいました。
17:00	お土産タイム@ラーメン館	ラーメン館まで向かい、それぞれおみやげを買いました。

18:00	夕食&交流会@天空回廊（酒蔵２階）	地元農家や地元の方を呼び、食堂「つきとおひさま」からケータリングした料理と大和川酒造の日本酒で交流会をしました。
20:00~	農家民泊(分泊)	7 組の農家に分かれ、それぞれ民泊をしました。
2 日目		
9:15	グリーンツーリズムサポートセンター坂内さんの講演	グリーンツーリズムの取り組み、震災後のグリーンツーリズムへの影響などをお話していただきました。
9:35	アスパラ農家　武藤さんの講演	震災当日のアスパラ農園の様子や、震災後の状況についてお話していただきました。

10:00	アスパラ収穫 放射線測定・散策	2 グループ交代制で、アスパラ収穫を体験したり、敷地内の放射能測定をしました。
11:20	喜多方市役所周辺 散策＆昼食（各自で）	ラーメン券(500 円分)を参加者に配布し、それぞれお店を探し喜多方ラーメンをいただきました。

13:00	ワークショップ@厚生会館第 3 会議室	ワールドカフェ形式のワークショップで、2 日間のまとめをしました。 
16:10	郡山着	
20:30	新宿着	

〈参加者アンケートの結果〉

	悪					良		
	1	2	3	4	5	6	計(人)	平均
① ツアー全体について	0	0	0	2	7	18	27	5.59
②本ツアーの趣旨について	0	0	0	3	4	20	27	5.62
③本ツアーの料金設定について	0	0	1	4	9	12	26	5.23
④お食事について	0	0	0	3	6	18	27	5.55
⑤本ツアーのコンテンツについて	0	0	0	1	7	18	26	5.65
⑥タイムスケジュールについて	0	0	0	13	5	8	26	4.8
⑦学生スタッフの対応について	0	0	0	1	4	22	27	5.77
⑧地元の方との交流について	0	0	0	0	7	19	26	5.73
⑨他の参加者との交流について	0	0	0	1	6	20	27	5.7

参加者のコメント(抜粋)

・『「人と人をつなぐ」意義のとても感じられるツアーでした。今後とも大切にしていきたいつながりです。将来は何らかの形で地元に貢献できる仕事就きたいです。今回のツアーで、そのヒントが少し見えた気がします』(20 代　女性)

・『思っていた以上の得るものがありました。喜多方で頑張っている方々や、福島に関心を持つ参加者の方々と交流することができ、来てよかったなと思いました。』(20 代　女性)

・『本当に意義のあるツアーでした。このような企画を学生が中心になってアクションを起こしたということに、驚きと感動があります。実際に一歩を踏み出すというのはエネルギーのいることですが、これからも頑張ってください。』(20 代　男性)

・『いっぱい思う所、感じる所があって、内容の濃い 2 日間でした。改めて、何をしようか、何ができるか考えさせられました。色々な気持ちを感じました。ありがとうございました。』(20 代　男性)

・『メディアでしか知らなかった福島を、自分の目で見て、感じて、知ることの大切さを実感しました。』(10 代　女性)

・『肌で福島を感じることができました。イベントどれも、とても楽しかったです。現地の方々のお話を聞いて、本当の福島の姿を知ることの大切さが分かりました』(10 代　男性)

・とても配慮が行き届いていて感心しました。(40 代　男性)

〈ツアー担当者の声〉

今回喜多方観光ツアーを実施し感じたことは、まだまだ知らない福島がたくさんあるというでした。

喜多方は津波の被害はなく、地震の被害もそんなにないところでしたが、原発事故後年間 7000 人いたグリーンツーリズム観光客が 0 人に減ったり、農作物の値段が大幅に下がっていたりなどの被害を受けていることが視察の際に分かりました。しかし、喜多方の被害は目に見えづらく、報道ではめったに取り上げられたことはありません。そのため、現状を知らない人たちがたくさんいたように感じます。私もその 1 人であり、視察に行くまで喜多方で苦しんでいる人たちがいることに気づきもしませんでした。そのため、今回ツアーを実施することができて、参加者の方にメディアでは知ることができない喜多方の被害の様子を五感で感じとってもらうことができ、非常に有意義なものになったと思います。

しかし、現状を見てもらっただけでは、現地の復興のたった一歩にしかすぎず、これからも長いスパンでの支援が必要になってくると思います。たったの一歩にはすぎませんが、それでも参加者の最初の頃と最後の頃の顔つきの変わりようや、ツアーの時の様子、ワークショップのときにそれぞれに書いた言葉などから強い意志を感じました。少しでも復興を担う若い人たちに福島について興味・関心を持ってもらえたのだと思います。この参加者たちから、若い人たちみんなが力を合わせて復興を加速させていってもらえるような期待を持つことができました。参加者のみなさまには本当に感謝しています。

福島の中で、困難を抱えているところは喜多方だけではありません。まだまだ解決していない問題もあります。まずはその問題を知ることから、地域にクローズアップし、ほんの少しでも手助けになる活動をしていけたらいいなと思いました。

私は今回このようなプロジェクトに関わることははじめてであり、緊張と不安の連続でしたが、メンバーや地元の方々、参加者のみなさんに支えられて、なんとかツアーを成功させることができ、本当に満足に思います。情報共有ができていなかった、参加者への配慮が行き届かない場面があった、など反省点は多々ありますが、それらをしっかりと踏まえつつ、『福島を復興させていく、そのためにはどうすることが復興のためにつながるのか』、そのような意識をもう一度しっかりと持って行動をしていきたいと強く感じました。

観光ツアー担当

鈴木麻友

スタ☆ふくを終えて、今振り返るとこの 3～4 カ月間は怒涛の日々であったことを思い出します。まずは、現地のリサーチから始まりました。丹波先生たちや、福島交通の社員さんと会津や喜多方を回りました。会津も喜多方も素晴らしいところです。どこかレトロで昔の趣が残っていて、蔵も上手に現代風に活用しております。また行きたくなるような、ほっとするけど、どきどきもするそんな場所でした。何より印象に残ったのは、自然と人です。笑顔があふれ、やさしく、家族のような安心感を与えてくれる方々が出迎えてくれました。農家民泊先のお母さん、喜多方市役所の観光課の職員さん、会津若松市役所の観光協会の職員さん、グリーンツーリズムサポートセンターの方、NPO まちづくり喜多方の方々、大和川酒造の社長さん、農コミュニティカフェろくさいの方々、会津木工所の社長さんなどたくさんの方とお会いできました。

会津若松・喜多方は観光資源が豊富で、福島の観光地として力を注いでいる地域です。そんな活気のある場所が震災以降、すっかり観光客は激減してしまいました。農業もさかんですが、風評被害で福島県産というだけで売り上げも減少してしまい、農家の方々は追い込まれていきました。市役所の方々や現地の方々の声を聴くと、「どうしたらよいものか、まったく分からない。たすけてほしい。」といった切実な声もちらほら聴かれました。

昨年、震災以降テレビで会津地方の修学旅行生がぱったりと来なくなったという放送は見て福島の震災の被害は知ってはいたものの、現地に行くとより切実に自分事のように感じられました。

実際に行ってみると分かること、感じるものがそこにあるのを知って、ツアーでの参加者の方々にも伝えたいと思うようになりました。実際に会って話して仲良くなると、もうお客さんではなく、まるで家族のような、または友人のような存在になることに気が付きます。現地の人たちが震災で影響を受けてもなお頑張っている姿を見て、「助けたい。何かできないか。まだ終わっていない。」という思いが自然と湧いてきました。

参加者からも「福島のことは日本のこと」という言葉を聴き、本当にその通りだなと感じました。そんな風に思っていただけたことをとても嬉しく思います。そして、自分自身も気を引き締めました。第一回スタ☆ふくは終わってしまいましたが、大好きな福島のために今後私自身何ができるのかを考え続け、福島とずっとつながっていきたいです。そして、福島のことを自分事のように思える人であり、第二の故郷として福島を思い続けていきたいと思います。

観光ツアー担当

三浦奈央

5-3. 農業ツアー

〈テーマ〉
『二本松を第二のふるさとに』

〈テーマ設定の背景〉
今回農業のツアーを実施した二本松市東和地区は、県内でも震災前から特に農業に力を入れてきた地域です。農業従事者の高齢化などが問題視される中、新規就農者も多くいます。ここでは農業の他にも豊かな自然を活かしたグリーンツーリズムや、地域のコミュニティに関わる様々な活動が行われてきました。しかし、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災によってこのまちも苦難を強いられました。震災直後は警戒避難区域である浪江町の人々が大勢避難し、まちは大きく揺れ動きました。現在でも農家は風評被害に苦しんでいます。そんな中でもこのまちをより良くしようと活動を続けてきた人々がいます。東和の人々がどんな思いで震災前、震災後活動してきたのか。「福島の野菜って本当に危険なの？」という疑問に対し、農業に関わり東和に生きる人々に焦点をあて、講話や体験活動を通して福島への関心・理解を深め、このまちを好きになってもらえればと、このテーマを設定しました。

〈実施日〉
2012 年 9 月 8 日（土）～2012 年 9 月 9 日（日）

〈動員人数〉
計 24 名（東京発： 15 名／福島発：9 名）

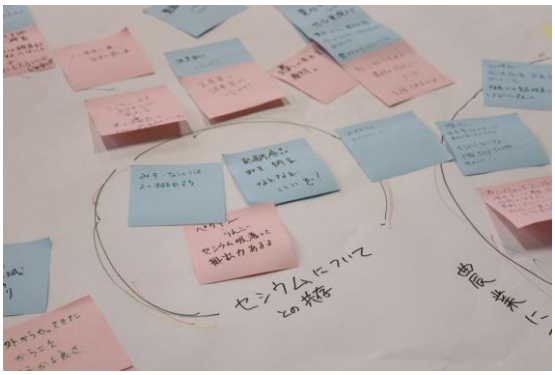
〈料金〉
東京発：20500 円／二本松発：18400 円

〈ツアーの行程〉

時間	行程	Comment

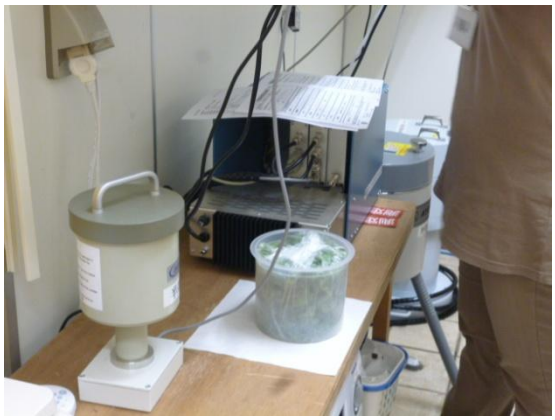
1 日目

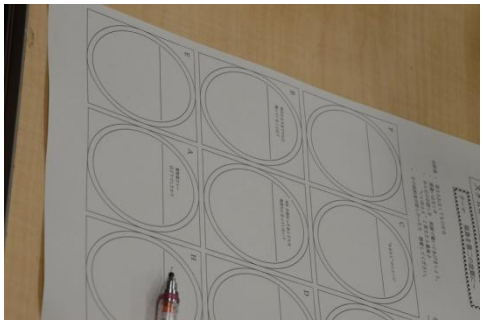
7:45	新宿駅集合	スタッフがお出迎え。
11:00	二本松駅到着	福島からの参加者とも合流。
11:30	昼食	B1 グルメ浪江焼きそばを食す。とってもボリューミー！

13:00	隠津島神社参宿所着、農業塾	
	講演会①	茨城大学名誉教授中島紀一先生のお話
	講演会②	NPO 法人東和ゆうきの里理事長大野達弘さんのお話
	分科会	農業、コミュニティ、地域文化の 3 つのテーマに分かれ、それぞれの分野に関する地元の方をおよびし、テーブルトークをしました。 
16:30	入浴	ウッディハウスのお風呂に入りました。ここの宿泊施設にはずっと原発作業員の方が寝泊まりしています。

19:00	夕食・交流会	地元も食材をたくさん使ったBBQの他に、郷土料理「ざくざく」や地元の方が持ち寄ってくれた料理、地酒がたくさん！

2日目

9:00	夏野菜収穫体験	畑でナスとトマトとインゲンを収穫。
10:20	放射線測定＆カレーづくり	道の駅東和で、収穫した野菜の放射線量を測定し、カレーを作りました。 
11:30	昼食	夏野菜カレーをみんなで食べました。

12:10	講演	道の駅東和の海老沢さんの放射線についてのお話。
12:30	ショッピング	道の駅でお買い物。野菜や地酒、お菓子など、どれもここでしか買えません。
13:00	ワークショップ&まとめ	あなたにとってふるさとって？ 
16:00	出発	

16:30	二本松駅着	学生スタッフと福島からの参加者はここでお別れ。別れが悲しい。
19:50	新宿駅着、解散	無事に到着。解散です。

〈参加者アンケートの結果〉

満足度

	悪 1	2	3	4	5	良 6	計（人）	平均
① ツアー全体について					7	18	25	5.72
②本ツアーの趣旨について					5	19	24	5.79
③本ツアーの料金設定について		1	3	4	6	10	24	4.88
④お食事について			1	1	3	20	25	5.68
⑤本ツアーのコンテンツについて				3	6	16	25	5.52
⑥タイムスケジュールについて			1	7	7	9	24	4.8
⑦学生スタッフの対応について				1	4	20	25	5.76
⑧地元の方との交流について			1		4	19	24	5.71
⑨他の参加者との交流について				2	5	18	25	5.64

参加者のコメント（抜粋）

- 福島の農業について悪いイメージしかなかったが、農家の方の話などを聞いて福島産の野菜のイメージが変わった。（20 代・男）
- 顔と名前が分かる福島の人とのつながりができた。今後も東和とつながっていきたい。（20 代・女）
- 予想に反してすごく前向きな気分で帰れるのがすごくよかった。（20 代・女）
- 学生企画というところに心意気を感じ、いままでの学生観が大きく変わった。（50 代・女）
- 実際に見聞きして、噂と現状の違いを感じた。（10 代・女）
- 農家の方と近い距離で関われたのがよかった。仕事=生活という考えに共感した。（20 代女）

〈ツアー担当者の声〉

今回、農業のツアーを企画し一番感じたことは、まだまだ自分の知らない福島がたくさんあるということでした。私は福島出身で、ずっと福島で育ってきました。私の実家も農家ということもあり、風評被害の問題などネガティブなイメージしかありませんでした。須賀川市では農家が自殺するという事もありました。しかし、今回訪れた東和地区はすごく前向きで前に進んでいるという印象を受けました。もちろん農家の方も風評被害などで困っており、所得が大きく落ち込んでいるのも事実です。キュウリの値段は震災前の半分になり、収入も半分になりました。それにも関わらず誰も下を向くことなく、今回のツアーも快く受けいれ、お話をしてくれました。震災前から農業やグリーンツーリズムに力を入れていた地域でもあり、震災後に新規で就農した方もいます。後日、農家の方の家で反省会をしたときも新規で就農したいという方からまた一人相談があったと言っていました。ツアーを通してこのまちが前を向いて進んでいるのだと深く感じました。ひとくくりに福島といっても地域によって全く事情が異なります。福島県は全国でも面積が第三位で、浜通り、中通り、会津の 3 つの地域で文化も気候も全く変わります。放射線量に関しても地域によって差があります。今回訪れた東和地区は阿武隈高地を挟んで原発のある浪江町のとなりに位置します。講演をしてくださった茨城大学名誉教授の中島先生によると、東和のほとんどの田畑からはセシウムが検出されなかったそうです。これは「福島の奇跡」と呼ばれ、長年農業に力を入れ、手いれをしてきた東和の土がセシウムを分解したからと考えられているそうです。このことは私も全く知らず、参加者もこのツアーで一番興味を持たれた出来事のようでした。2 日目には収穫した野菜の放射線量を測ってカレーを作りましたが、ここでも全く放射線は計測されませんでした。このようにニュースなど 2 次的、3 次的な情報から福島の野菜は危険だと決めつけるのではなく、実際に自分で見て聞いて体験することで、理解を深められたことは大きな収穫でした。

企画を通してまだまだ至らないところもありましたが、参加者と地元の方の笑顔が見られたことでやってよかったという達成感がありました。この企画が成功に至ったのも地元の方々、および協力してくださった福島交通観光はじめ、たくさんの方々のお力添えがあってのことです。改めて感謝を申し上げるとともに、今後はもっと福島や地元に実利のあるツアーにできるよう、継続してやっていきたいです。

農業ツアー担当

伊藤崇史

6. 広報／メディア掲載について

スタ☆ふく HP の立ち上げや、宣伝方法の経緯

6 月	29 日	スタ☆ふく HP 作成決定
7 月	4 日	㈱福島交通観光 HP にて募集開始 福島大学にて記者会見
	27 日	福島大学にて説明会
	28 日	オリンピックセンターにて説明会（Link　with　Fukushima の協力で実現）
	31 日	漁業ツアー催行確定
8 月	22 日	観光ツアー催行確定
	23 日	農業ツアー催行確定

・HP（http://watalucky.com/jasp/tour/）
…ツアーで会える現地の方の紹介や、ツアー企画者の想いを載せたことで、スタ☆ふくの魅力である「現地の方や学生スタッフと参加者との交流が多く、距離が近いこと」が伝わるよう工夫しました。

・facebook（http://www.facebook.com/3.11JASP）
…テレビ出演の情報や協力者の紹介をしました。

・Twitter（@3_11jasp）
…準備の進捗状況や申し込みの期限延長などの情報をこまめに発信しました。

・ブログ（http://jasp-sutafuku.jugem.jp/）
…視察の様子や準備段階のメンバーの心境を写真とともに綴りました。

・テレビやラジオへの取材申し込みと番組出演
・新聞社への掲載依頼
・福島大学教授への宣伝
・主に首都圏の大学のボランティアサークルやメーリングリスト
・Web マガジン
・３テーマ（漁業、観光、農業）に関連する団体
・メンバーの知人への宣伝

メディア掲載履歴

新聞

東京新聞（7 月 7 日付）

今の福島を見て、聞いて、感じてほしい―。福島県の若者たちが、県外の人を招くスタディーツアーを企画した。第１弾は８月中旬～９月上旬に開催。漁業・観光・農業のテーマで県内の人と交流しながら復興を考えるプログラムだ。参加者を募集している。（出田阿生）

今の福島 見て感じて

漁業・観光・農業 現地の人と交流

福島大生らツアー企画

企画の中心となったのは福島大（福島市）の学生たち。「福島の問題を風化させたくないとの危機感がきっかけだった。福島交通観光などが協力し、実現した。

学生らはこれまでにもイベントを開催。県外の二十五県で、福島へのメッセージを書いた横断幕を手に約千人がすきをつなぐリレーを実施するなどした。

福島大三年吉田哲朗さん(23)は「大成功だった。原発事故の風評被害などの側面を伝えきれなかった。本当に、交流が特色。漁業の部は、いわき市へ行き、漁師と漁船に乗る。津波被害の福島を知ってほしいと思った」と話す。

ツアーはバスで東京・新宿発。一泊二日で農業や漁業、観光を体験し、水産加工場や酒蔵に寄った。復興を目指したイベントを見学する。現地の人との交流は、福島県の若者たちが、県外の人を招くスタディーツアーを企画した。第１弾は８月中旬～９月上旬に開催。漁業・観光・農業のテーマで県内の人と交流しながら復興を考えるプログラムだ。参加者を募集している。

課題を聞いたりする。観光の部は喜多方市へ。地元の農家に宿泊し、酒蔵を見学。飯舘村からの避難者や、街づくりの市民団体メンバーの話を聞く。

農業の部は、二本松市にある神社の宿泊所に泊まり、農業専門家の話を聞く。翌日はトマトやキュウリを収穫し、カレーをつくる。放射性物質の測定もする。

参加費は①漁業の部（八月十八～十九日）一万九千九百円②観光の部（九月一～二日）一万七千円③農業の部（九月八～九日）一万五千円。

申し込み締め切りは①今月二十七日②八月十日③同十七日。問い合わせは、福島交通観光（０２４（５３１）８９５０。

ツアーの事前取材でかつお節工場を訪れた吉田哲朗さん(右)と阿部詩音さん(左)＝福島県いわき市で

福島民報（7 月 24 日付）

来月と９月、旅行ツアー

福大の学生団体企画 県内３コース

福島大の学生を中心に構成する学生団体「JASP」は八～九月に県内外の学生や社会人を対象にした三つの旅行ツアーを企画した。同団体は、いわき、「喜多方」、「二本松」の各コースの参加者を募集している。

旅行ツアーの名称は「福島を感じて考える スタディーツアー『スタ☆ふく』」。各コースとも一泊二日の日程で、福島の現状に理解と関心を深めるアイデアを提供してもらうことで復興の動きを加速させる。

ツアーをPRする（左から）阿部さん、吉田さん、熊沢さん

「いわき」コースは漁業をテーマに、津波を経験した漁師の体験談を聞き漁船に乗船する。中小企業診断士を交え、いわき市の産業復興の方策を考えるワークショップも開く。

「喜多方」コースは観光がテーマ。農家に民泊しアスパラガスの収穫を体験する他、酒蔵を見学する。農業がテーマの「二本松」コースでは、収穫した夏野菜でカレーづくりを体験し、交流を深める。

日程は「いわき」が八月十八、十九日、「喜多方」が九月一、二日、「二本松」が同八、九日。料金は県内発が一万千円～一万八千四百円となっている。

締め切りは「いわき」が二十七日、「喜多方」が八月十日、「二本松」が同十七日。実施主体の福島交通観光のホームページから申し込む。問い合わせは福島交通観光 電話０２４（５３１）８９５０へ。

JASPの吉田哲朗さん、阿部詩音さん、熊沢千裕さんは十九日、福島民報社を訪れ、ツアー参加を呼び掛けた。

読売新聞[福島県版](7 月 24 日付)

福大生企画 復興ツアー

3コース 漁業体験や住民交流

東日本大震災後の県内の現状を知り、復興策を考えてもらおうと、福島大（福島市）の学生団体「JASP福島」が、観光や漁業などをテーマに県内をめぐるツアーを企画した。参加者を募集している。

ツアーは「水産・漁業」（いわき市で8月18、19日）、「観光」（喜多方市で9月1、2日）、「農業」（二本松市で9月8、9日）の3コース。漁船乗船、野菜の収穫、水産加工場や酒蔵の見学などの体験メニューに加え、夕食時には地元住民との交流の場が用意されている。農業コースでは、収穫した野菜の放射性物質量も計測する。

企画した同大人間発達文化学類3年の吉田哲朗さん(20)は「特に若い世代に来てほしい。その土地の人と話をして、地域をよくするアイデアを出してもらえればうれしい」と話している。

福島交通観光ホームページ（http://www.fkk21.com）で申し込む。締め切りは「水産・漁業」が7月27日、「観光」が8月10日、「農業」が8月17日。

問い合わせはJASP福島事務局（3.11jasp@gmail.com）へ。

朝日新聞[東京版](7 月 24 日付)

福島の農業現場 来月学ぶツアー

福島大生ら企画

原発事故の影響が続く福島県の農業の現状を現地で見て知ってもらおうと、福島大学を中心に組織する学生団体「JASP（全国学生プロジェクト）」が、東京発1泊2日の学習ツアーを9月8日に実施する。

バスで新宿を出発。有機無農薬農業で知られ、放射能被害を防ぐために線量測定や作業の工夫を続ける二本松市東和地区を見学しな

交流は2泊3日の日程でこのほか、一緒に水上バスに乗ったり、東京スカイツリーを見学したりする。（黒川和久）

アストロン いわき市長に決意

全日本少年サッカー

第36回全日本少年サッカー大会に2年連続で出場する県代表のアストロン（いわき市）が23日、いわき市役所に渡辺敬夫市長を表敬訪問し、活躍を誓った。

高田泰樹監督と6年生のメンバー計14人が訪れた。金森玲音主将（市立平五小6年）は「福島の代表として恥じないよう頑張り、優勝を目指します」と決意を語った。渡辺市長は「被災地で苦労したと思う。全国大会出場は、大人の方が勇気づけられる」とメンバーをねぎらった。

110 119

●トラックにはねられ女性死亡 11日午前1時10分ごろ、大田区大森北6丁目の環状7号線で、横断していた同区大森西2丁目、無職山岡光枝さん(61)

がら、地元の人の講話や参加者が感想や提案を語り合うワークショップを行う。

企画代表の福島大3年、吉田哲朗さん(20)は「福島を支援したくても何をしたらいいかわからなかったり、過度に危険と思い込んだりしている人もいる。実情を見て、前向きな提案をもらえたらうれしい」。

参加費は2万500円。定員30人で、17日まで受け付け。問い合わせは福島交通観光（024・531・8950）。

朝日新聞[東北版]（9 月 14 日付）

ソシテワスレズ
@キャンパス

立教スポーツ

福島の住民と交流、問題再確認

今月1～2日、スタディーツアーに初めて参加した。福島県喜多方市の人たちと交流したり、現状を学んだりする「スタ☆ふく」だ。そこで配られた名札には、こう書かれていた。

「〝本当〟の福島を知ってほしい。これが、その一歩。」

福島市出身で、東京暮らし3年目の私。1泊2日のツアーで、この言葉の意味をかみ締めた。

「スタ☆ふく」を企画したのは「JASP（Japan All Students Project）」。東京電力福島第一原発事故を抱えた福島県の現状を知ってもらい、復興を目指そうと、福島大の学生が昨秋立ち上げた団体だ。

「地元の学生だからできる、地元とのつながりを大切にしたツアー」とJASPの石井正和さん（4年）。8～9月、いわき市で漁業、喜多方市で観光業、二本松市で農業をテーマにして、学生や社会人が参加した。

喜多方市では、江戸時代から続く酒蔵を見学し、震災後の売り上げの変化や他の地域とのコラボ商品の開発について話を聞いた。住民との交流会では、地酒や食堂の料理を堪能できた。

その夜は「農泊」。一般の農家でのお泊まりだ。私は、秋田県出身の2人と一緒に花を生産する農家にお邪魔した。農園の話、郷土料理の話、方言の話、放射能汚染や風評被害の話。「福島に来なかったら、こんな生の話なんて聞けない」。仲間は、そう話した。

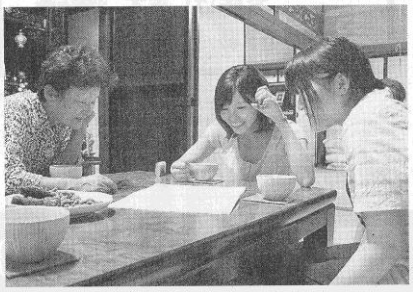
翌日、アスパラ農園で空中放射線量の測定を体験した時、仲間の何げない会話にハッとした。福島県出身の参加者が線量の高い低いを話題にしていると、県外の参加者が「高いのかも低いのかも分からない」と言ったのだ。福島県出身の私たちには、線量がとても身近になってしまっている。地元が直面する問題を再確認した。

最後のプログラムはワークショップ。「2日間で感じた自分の変化」「What can I do?」というテーマで話し合った。多くの人たちが「福島で聞いたり見たりしたことを周りに伝えたい」と話していた。

スタ☆ふくプロジェクトリーダーの吉田哲朗さん（3年）は、ツアーの最後に「参加して下さった方々の価値観に変化が起こる2日間になっていたらいいなと思います」とあいさつした。

福島に来たからこそ知ることも、価値観が変わることもある。2日間で交わした多くの会話、そして郡山駅と新宿駅で解散した仲間たちの笑顔が、それを証明していた。

（立教大3年・三浦美紀）



「農泊」を体験する「スタ☆ふく」の参加者と農家の女性（左）＝1日夜、福島県喜多方市

※同内容の記事が下記ページに掲載されています。

http://mytown.asahi.com/miyagi/news.php?k_id=04000711209140001

テレビ	関連 URL
8 月毎週金曜日 23:30～放送 NHK　E テレ「東北発☆未来塾」	http://www.nhk.or.jp/ashita/miraijuku/archives/
8 月 10 日 19:50 頃 福島中央テレビ「ゴジてれＣｈｕ!」	http://www.fct.co.jp/goji/movie/
9 月 6 日 23:30～23:54 NHK　E テレ「青春リアル特別シリーズ　福島をずっと見ている TVvol.16」	https://cgi2.nhk.or.jp/ss-real/fukushimatv/form2.cgi?cid=11&pid=4622
9 月 10 日 NHK 国際放送	http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/english/movie/feature201209101302.html

インターネット	掲載 URL
サンドウィッチマン冨澤さんのブログ	http://ameblo.jp/takeshi-tomizawa/entry-11293193974.html （E テレの番組「東北発☆未来塾」の企画で福島大学に足を運んでくださいました）
Link with ふくしま様	http://linkwithfukushima.jimdo.com/activities-%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%86%85%E5%AE%B9/%E3%82%A4%E3%83%99%E3%83%B3%E3%83%88/%E3%83%84%E3%82%A2%E3%83%BC/
	http://link-with-fukushima.blogspot.jp/2012/09/blog-post_24.html
	http://link-with-fukushima.blogspot.jp/2012/09/blog-post_9791.html （首都圏での広報に全面的にご協力いただきました）
ＱＤふくしま様	http://quebec-delta-gyogyou.jimdo.com/ （漁業ツアーのコーディネートをしていただきました）
中小企業診断士・小野晴世様のブログ	http://prfukushima.blogspot.jp/2012/07/4-2-jasp-2012311jasp1-312-1825-81819727.html http://prfukushima.blogspot.jp/2012/07/blog-post_16.html （漁業ツアーのワークショップでファシリテーターを務められました）
片平正子様のブログ	http://collage.exblog.jp/18134977/ http://collage.exblog.jp/18191888/ http://collage.exblog.jp/18216173/ （農業ツアーの食事作りとワークショップに携わってくださいまし

	た）
ワカツク「東北1000プロジェクト」	http://www.tohoku1000.jp/projects/detail/?id=136
うつくしま観光プロモーション推進機構「福島の旅」	http://www.tif.ne.jp/jp/topics/topics_disp.php?id=374
愛チカラのブログ	http://ameblo.jp/i-aichikara/entry-11311300307.html
筑波大ボランティアセンターのブログ	http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~piara/cgi-bin/newsboard/newsboard.cgi?Num=2
Yahoo! JAPAN　-復興支援　東日本大震災　-ボランティア情報	http://shinsai.yahoo.co.jp/volunteer_db/detail/tasukeai_japan/4326.html
助け合いジャパン≫旅して応援	http://tasukeaijapan.jp/?cat=184#tabA
ふくしま地域ポータルサイト「ももりんく」	http://event.i-fukushima.jp/
フクシマノコト	http://fukushimanokoto.jp/archives/637
NOPPO：農業界と大学生の出逢いの場を創る	http://satt-bbs.jugem.jp/?eid=158
ガクメル	http://gakumeru.com/gakuseievent/fukushima/
@Press	http://www.atpress.ne.jp/view/28765
オルタナS	http://alternas.jp/uncategorized/2012/07/21918.html
まちおこし・観光・不動産ニュース遊都総研.com	http://yutosoken.com/2012/07/post_696.html
環境goo	http://eco.goo.ne.jp/news/ecotrend/ecotrend_20120720_552.html
exciteニュース	http://www.excite.co.jp/News/release/20120719/Atpress_28765.html?_p=1
谷根千震災字報	http://311.yanesen.org/archives/1090

ふるさとふれあいプロジェクト	漁業： http://f-ouen.jp/search/detail.php?v=66&r=L3NlYXJjaC9saXN0LnBocD9wPTImc2VsR0NhdGVnb3J5PSZzZWxHQXJlYT0zJnNkZj0mc2R0PSZzaz0%3D
	観光： http://f-ouen.jp/search/detail.php?v=67&r=L3NlYXJjaC9saXN0LnBocD9wPTImc2VsR0NhdGVnb3J5PSZzZWxHQXJlYT0zJnNkZj0mc2R0PSZzaz0%3D
	農業： http://f-ouen.jp/search/detail.php?v=68&r=L3NlYXJjaC9saXN0LnBocD9zZWxHQ2F0ZWdvcnk9JnNlbEdBcmVhPTMmc2RmPSZzZHQ9JmlucHV0Lng9NDImaW5wdXQueT0yMSZzaz0%3D
手と手をネットブログ	http://tetotewo.net/modules/socialpointer/index.php?page=detail&bid=172&req_uid=0
BIGLOBE ニュース	http://news.biglobe.ne.jp/economy/0719/atp_120719_7300129244.html
がんばる福島←うわさのラブラブ写真	http://www.tif.ne.jp/fuku/information/details.html?id=2445
NewsAsiaBiz2	http://asiabiz.sakura.ne.jp/first_website/newsasiabiz/2012/07/post-16708.html#more
SankeiBiz	http://www.sankeibiz.jp/business/news/120719/prl1207190939003-n1.htm
二本松観光協会／二本松の観光情報	http://www.nihonmatsu-kanko.jp/
まちづくりＮＰＯ新町なみえ	http://www12.plala.or.jp/sinmachi-namie/
福島市デシャバリの会	http://desyabari.jugem.jp/
ふくしま　たびット	漁業： http://www.tif.ne.jp/jp/sp/tavitto/taiken/taiken_disp.php?id=334
	観光： http://www.tif.ne.jp/jp/sp/tavitto/taiken/taiken_disp.php?id=335
	農業： http://www.tif.ne.jp/jp/sp/tavitto/taiken/taiken_disp.php?id=336
ONETOPI	http://1topi.jp/1/r.sm3.jp/4Wv8

防災・復興ジャーナル - REVIVE -	http://revive.doorblog.jp/archives/12833509.html
ハナリンのみちのくロハスライフ	http://ameblo.jp/ohanakeiko/entry-11311646249.html
ボラ市民 WEB by 東京ボランティア・市民活動センター	http://www.tvac.or.jp/di/25690
デイリーぴんぽん紙　2012/08/13 版	http://paper.li/pinpon_2011/1308019164?edition_id=876d5fe0-e4f8-11e1-aca0-002590721286
ことさが - 7 月福島県のイベント情報	http://cotosaga.com/list?sort=&mylist=&owneruser=&word=&starttime_year=2012&starttime_month=7&starttime_day=4&endtime_year=2012&endtime_month=9&endtime_day=24&place=%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E7%9C%8C&tag=
こくちーず(告知'S).	http://kokucheese.com/event/index/48292/

ラジオ	関連 URL
7 月 13 日　17：30～17：40 FM ポコ　特別番組	
7 月 14 日　22：00～22：30 ラジオ福島「君の瞳に恋してる DX」	
7 月 20 日 J-WAVE「JAM The World ～WE ARE THE ONE～」	http://www.j-wave.co.jp/original/jamtheworld/heart/120720.html
8 月 10 日(金)　16:15 頃～　電話出演 TOKYO FM「よんぱち 48hours」	http://www.tfm.co.jp/48/

担当者の声（感想）

想いを伝える

スタ☆ふくの広報は「催行最少人数 30 人×3 ツアー＝90 人」にお申し込みいただくことを第一の目標に、さまざまなメディアや手法を使って参加者を募りました。ツアーの募集を開始する時期が遅れてしまうトラブルもあったのですが、それでも数多くのメディアに取り上げていただき、スタふくのことを県内外の多くの方に知っていただけたことは大変うれしく思っています。とりわけ 3 つすべてのツアーの催行が決まった時は、言葉では言い表せない喜びがありました。

しかし、広報の反省点は多くあります。広報の仕事を振り返ってとくに強く感じるのは、「参加者の立場に立った広報」ができていれば、ということです。ビラの制作と HP の運営を専門の方に依頼し、どちらもデザイン性の高いものができました。しかしビラは旅程の部分に重きを置きすぎて、肝心の「想い」の部分をあまり入れることができませんでした。ビラを手に取った人が、ぱっと見ただけでもどんなツアーかわかるように、何を伝えたいのかをもっと明確にすべきだったと思います。

また、集客には「やみくもにたくさん」よりも「1 人 1 人に直接想いを伝える」方が効果的だとわかりました。足を使った広報、つまり首都圏に足を運んで自分の声と言葉で宣伝することももっと必要だったのではないかと思います。

広報活動は長期戦で終わりが見えず苦労しました。しかしどんなに参加者が集まらなくても、とにかく発信し続けること、今できる術を尽くすことが大切だと思いました。

たくさんの方の協力に感謝

結果的に 3 つのツアーすべてを催行することができましたが、これは㈱福島交通観光様のご厚意によるものです。3 ツアーとも申し込み締め切りを延長していただきましたし、25 名という人数でも催行を承諾してくださいました。個人的には、観光と農業のツアーの申し込みが 30 人に届かなかった原因は、広報の弱さにあるのではないかと考えます。

スタ☆ふくの広報には、お金をほとんどかけていません。HP の立ち上げ・運営には JASP の HP を作ってくださった浅井渉さんが尽力してくださいました。ビラもボランティアで作っていただきました。そしてスタッフ以外のたくさんの方にご自身のコネクションや SNS を使って、スタふくの広報にご協力いただきました。スタ☆ふくを広めてくださったすべての皆様、そして集客のため奔走してくださった皆様に、この紙面を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

広報担当
熊澤千裕

7. スポンサー／ご協力いただいたみなさま

〈協賛〉

(株)バルニバービ　／　NPO 法人まちづくり喜多方

〈水産・漁業ツアー〉

コーディネーター：金田奈都子様（東京海洋大学/QD ふくしま）

丸貞蒲鉾合資会社／NPO 法人ザ・ピープル／いわき市農林水産部水産振興室／いわき市漁業協同組合の皆様／山一中田商店／和風レストラン福仙屋／古滝屋／小野晴世様／角田知行様

〈観光ツアー〉

コーディネーター：蛭川靖弘様（NPO 法人まちづくり喜多方代表）

大和川酒造・佐藤彌右衛門様／喜多方グリーンツーリズムサポートセンター・農家の皆様／きらりファーム

〈農業ツアー〉

コーディネーター：関元弘様(ななくさ農園)／片平正子様

中島嘉一様／隠津島神社／東和ゆうきの里ネットワーク／NPO 法人ゆうきの里東和の皆様／調理協力してくださった皆様／道の駅東和

〈その他広報等協力〉

浅井渉様…HP の作成・管理

任意団体 Link with ふくしま…東京都内での説明会の開催・宣伝協力

〈企画実施〉

(株)福島交通観光

このプロジェクトは一般社団法人ワカツクの「F＋Project」のご支援もいただいています。

8. 総括(おわりに)

「もっと福島のことを知ってほしい」という想いを持って、スタッフ一同これまで活動を続けてきました。2012 年 3 月に、「3.11Japan All Students Project」のイベントが終わってから一念発起して立ち上がったこのプロジェクトは、多くの方々のご協力を得て成功裏に終わることができました。これほど多くの方々に支えていただけたのは、当初は想定できないことでした。しかし、振り返ってみればここまでのご協力がなければ、プロジェクトの成功はありえなかったように思います。ご協力してくださってみなさまに唯々感謝申し上げたい気持ちでいっぱいです。

福島は、世界でも非常に特殊な地域となり、注目も浴びるようになりました。原発から半径 20km 県内は立ち入り禁止となり、放射線量も地域によってバラバラであります。コミュニティの崩壊も叫ばれ、福島と言っても様々な問題をかかえ、一言では語れないのが現状です。そういったマイナスイメージで見られる福島ですが、私は可能性を感じています。震災後さまざまな物事がスピード感を持って動いていくのを感じています。この変化こそ、復興へ向かっている証拠であると思います。20 年後、30 年後の福島に私自身は期待をしています。抽象的にはなりますが、様々な問題を解決し震災があったことが感じられないような「より良い地域」になっていることで、他の地域の手本になりうると思うのです。そのような地域を作るのも、未来の地域をフィールドにするのも今学生である私たちの世代であると考えています。大きなビジョンですが、未来のより良い福島という理想を持って、そのためにできることを今からやっていこうと思います。今行動することに意味があると思います。そうして行動を起こした一つのかたちが「スタ☆ふく」でした。

スタ☆ふくは「参加者」と受け入れてくださる「地域の人々」をつなぐことのできる 1 つの手段だと思います。さらに言うと、参加者に「原体験」を提供することができる企画だと思っています。これまで福島という地域に無縁であった参加者が、福島に想いを寄せるようになったことは 1 つの変化を引き起こしたと言えるでしょう。そして私自身、地域の人々も参加者とのふれあいを通して元気づいているように感じます。実際に来て、五感を使って感じてもらうことは、何にも代え難いですし、そうしなければ感じられないものがあるという確信を持っています。「原体験」とは、その人の行動の源や背景になっている体験のことです。今の福島には、困難な状況から立ち上がろう、歩いて行こうという人々が多くいます。そういった人々から発せられるエネルギーやオーラのようなものは、他者を刺激します。それが参加者にとっての原体験になりうると思うのです。そういった場と機会をスタ☆ふくで作ることができたのではないかと考えています。この作用は、多くの人に連鎖していく可能性を秘めていますし、そこから人々の行動が変わりムーブメントを生むかもしれません。参加者にとっても、受け入れる側の地域にとってもより良いものを

提供していくことが、私たちの使命だと感じています。

また、単なる旅行ではない被災地ツアーの取り組みを広めることも私たちにできることではないかと思います。被災地ツアーというと、見世物のように聞こえるかもしれませんが、決してそういった意味合いではありません。参加者にとっても、地域にとっても実りのあるもの。それが、その地域の活性化につながるような動きを生み出すようなものを目指したいです。今回、身を持ってツアーの取り組みが良いものだと感じることができました。多くの人のこの取り組みに参加してもらいたいと思っています。こうした活動の一つ一つが福島や東北、日本を元気づけるものだと信じてこれからも活動していきたい所存です。今後とも私たち JASP の活動をはじめ、学生の一生懸命な取り組みにあたたかい応援をいただければ幸いです。

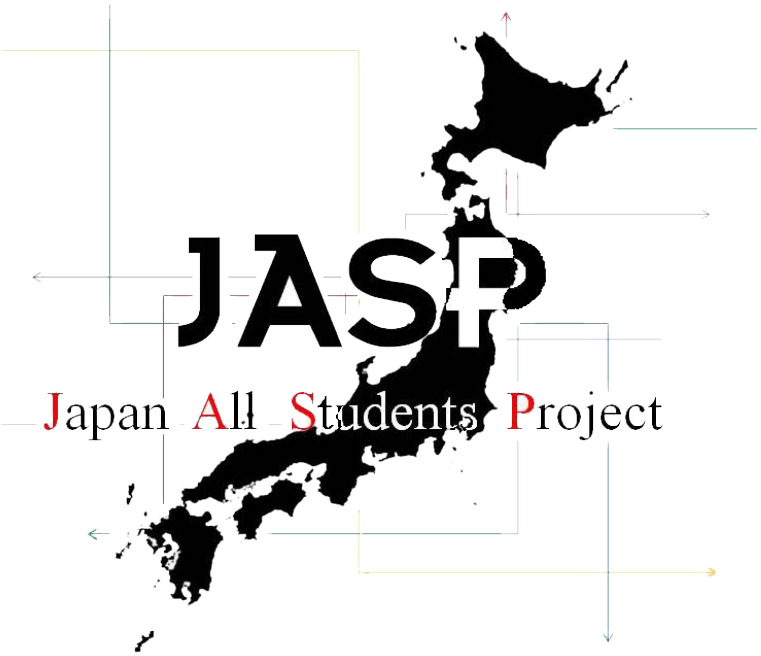
2012 年 10 月 5 日

プロジェクトマネージャー

吉田哲朗

スタ☆ふくプロジェクト　スタッフ一同

９．お問い合わせ



JASP（全国学生プロジェクト）
福島大学支部
代表：石井正和
住所：福島県福島市金谷川１
福島大学学生課
JASP 福島大学支部宛

Mail：suta.fuku@gmail.com
HP：
http://watalucky.com/jasp/tour/
ブログ：
http://jasp-sutafuku.jugem.jp/

編集

JASP 福島支部　「スタ☆ふく」プロジェクトメンバー

福島大学	人間発達文化学類	３年	吉田哲朗
福島大学	行政政策学類	４年	石井正和
福島大学	行政政策学類	４年	三浦奈央
福島大学	経済経営学類	４年	鈴木慎一郎
福島大学	人間発達文化学類	４年	菅井里奈
福島大学	人間発達文化学類	２年	阿部詩音
福島大学	人間発達文化学類	２年	伊藤崇史
福島大学	人間発達文化学類	２年	鈴木麻友
福島大学	人間発達文化学類	２年	熊澤千裕
福島大学	人間発達文化学類	２年	中村優志